
コネクト

蒼木荘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コネクト

【Nコード】

N3137BA

【作者名】

蒼木荘

【あらすじ】

高校生、会津弥一君が、誰かと、繋がる物語。

1話（前書き）

誤字・脱字があったら、大変申し訳ありません。
意味不明だと感じられた場合も、同じくです。

1話

声が聞こえる。

僕の声じゃない。

周りは何も見えない。ただ、無理やり胃に押し込むように、音だけが体に入り込む。

声が聞こえる。

「ネエ、ホントハ、シッテルンデシヨ？」

コンクリートを爪でひっかいたような、カサカサの声だ。

「君ノコト、大切って思ってくれる、ヒトナンテ・・・」
僕は立っているのか、座っているのかも、

「・・・絶対イナカッタヨ？」
わからない。

「ジブンハ、イクラカ、マシナホウ？」
知らない声。カサカサの声。

「ヤメテ、ハキソウ。」

鏡ヲ見テゴラン。

自分ノ顔ヲ、見テゴラン。

自分ノ声ヲ、聞イテゴラン。

自分ノオナカヲ、触ツテゴラン

自分ノ手ハ、ドンナ匂イ。

自分ヲ、思ツテ、感ジテ、光ヲ当テテ、見テゴラン。

チットモ、好キニナレソウモ、ナイでしょ

イイ加減、目ヲアケテ、
早く早く。

イヤニナツタラ、イツデモ、
「……私に、その席、譲って」

「……ん？」

目を開ければ、川越市駅から通り過ぎて三つ目の駅に着いたところだった。開いたドアから流れ込む十一月の少し冷たい空気に、鼻の先がツンとしている。

電車の発車音が鳴っている。安いメロディ。

ぼーっとして、柱に書かれている駅の名前を、たつぷり6秒見つめた。現状を飲み込む音が？ぐうルツ？と鳴ったかのように、やっと脳が目覚め、僕は急いで椅子から起きた。

発車音。

ドアは閉じてしまった。そして、飲み込む音なんて錯覚だった。

絶え間なく音を垂れ流していたウォークマンの液晶は現在時刻21:18を示している。はじっここの席に再び座り、頭部を金属製の手すりに預ける。冷たい。

誰かが触ったのかわからない手すりや、法律事務所の広告だの、網棚に置き去りにされたスポーツ新聞だのは蛍光灯の光を反射して、僕の目で焦点を結ぶ。その風景は、無機質で一枚のアルミの板を見てるみたい。

夜の窓ガラスに僕の姿が映ってる。我ながら、随分と質の悪い目付だ。いつも不吉にニタニタと”笑っているせえるすまん”の寝起きの顔は、きつと今の僕みたいなんじゃないか。

加えて残念なことに、寝起きであろうが、起きていようが、僕はこんな顔をいつもしている・・・らしい。

不機嫌というか、幸薄いというか、心のスキマだらけの人だって、無表情がこんな風になることはないだろうに。意識していないのに、眉間にしわが寄って、切れ長の目は座っている。歯並びがいい方じやない。口を開けばギザギザの歯。無理して笑って、

うひひ、と口にすれば、間違いなく妖怪・・・らしい。そんな笑い方生まれて、一度もしたことはないのだけれど。

この顔は嫌だ。この顔、嫌いだ。

僕はウォークマンの停止ボタンを押した。

「やっぱ音、ちゃんと切らないと寝ちゃうな。いつも。」

それに、・・・変な夢を見てばかりだ。

引きかえして川越市駅に、戻ってくるのに30分もかかった。コンビニで立ち読みしてから帰ろうかと思ったが、やめた。

眠い。

どうしてなのか、どうしても、眠い。

駅から、駐輪場に止めてある自転車に乗り、家までは15分。さすがに、ペダルをこいでいると脳に血が巡り、少し眠気がやわらいだ。でも早く帰って、寝よう。

僕の家は、市街から少し外れた、田んぼやら、畑やら、名も知れない地方スーパーやらが集まる、ほら、言ってしまうえば土地価格の低めの、住宅地。

収穫をとくに終え、ひび割れた地面をむき出しにした田んぼを横目に、街灯が少な目の道を自転車で走る。高校卒業まで後、何往復この道を行き来するんだろうと考えたり、考えなかつたりしながら、毎日この道を自転車で走った。吸い込む空気は、冷たくてほこっりっぽい匂いがした。

見上げた空には、満月が浮かんでた。月が周りの雲を照らし出し、その形を昼間よりも、くつきりと浮かび上がらせている。市民公園近くから生えている電気鉄塔も、その恩恵を受けて、青いシルエツトとして映る。その風景がほんの少しだけ幻想がかってて、僕はたまに見えるこんな空と、？田んぼ？と？鉄塔？という組み合わせが好きだったのだ。

家に着き自転車を止めて玄関の戸を開ける。キッチンの明かりは付いていた。テーブルにパジャマ姿の母さんが突っ伏して寝てる。今日も、ずっと仕事だったのだろう。薬剤師である母さんは病院から指示のある限り、薬を患者に処方し続ける。救急呼び出しとかそういう臨時出勤は無いけれども、朝は早く、夜は遅い。起こさないように、静かに自分の部屋に向かったつもりでも、この人は絶対起きる。

「あれ？・・・弥一、おかえり。・・・ご飯は？」

「適当に食べるから。もういいよ。」

「そう・・・。今日遅かったけど、何かあった？」

「いや、寝過したただだよ。」

疲れてるなら、栄養剤もらってこよっか？と母さんは言ってくれたが、薬を飲むほどじゃないので断った。

「冷蔵庫に煮物、入ってるからね、温めて食べて。おやすみ。」
椅子から立ち上がり、母さんは自分の寝室のドアを開けてベッドにそのまま倒れこむ。

眠っている母さんの顔は、少し困ったような寝顔だった。
父さんが、いた頃の母さんはまだ元気だったように思う。

冷蔵庫のマグロの煮物を冷たいまま食べて、服を着替えてベッドに潜る。風呂に入らないで寝るのは、本当はいやだけど、やっぱりおかしいくらいに眠かったのでそんなことも考える暇もなく眠りに落

ちた。

家族だからって、日曜日コメディドラマみたく、絶えず楽しい会話と笑顔が渦巻く家庭は絶対ない。

気付いたのは、多分小学五年生になった時、父さんの死に顔を見た時だ。

父さんは僕と違ってよくしゃべる人だった。自分も仕事で忙しいのにいつも、僕と母さんを気にかけてくれた。元々あまりしゃべることの少ない僕と母さんは、それでも父がいた頃は割と笑いあえた。

小学校の頃、漢字テストの出題範囲を間違えて勉強してしまい。クラス最低点を取って、それをクラスのみんなに笑われたことがあった。口下手な僕は反論もできず、顔を真っ赤にして、涙をこらえて黙っていた。

「会津君は、漢字、練習する時間なかった？次は頑張ろうねえ。」べつとりと貼りつけた笑顔でそう言った当時の担任の顔は、今でも思い出せる。

小学校のテストは、割と満点なんてホイホイとれるものであったよ。うな気がするし、そして、30点代なんてとってしまった日には、ひどい扱いを受ける。その日の僕がそうだった。下校の時、僕の下駄箱は割と悲惨なことになってたと思う。帰り道は誰にも会わないよう、指定された通学路とは別に道を使い、泣きながら帰った。

父さんは、そんなボロボロだった僕に優しくしてくれた。

帰って僕が一人、部屋で泣いていた時、父は何も聞かずに

「弥一、『マイキー！』一緒にみよう。」

なんて言ってた。うちには、オー！マイキーが全シリーズ揃ってる。もちろん父さんが集めた。今思えば、それは父さんなりの励ましだったんだろうけど、僕は悲しくて悔しくて、

「そんなの見たくない！！」

と怒りながらもそう言った。でも、父さんは怪獣みたいに大きく口を横に広げて言った。

「1話だけでいいからさ、見よう！なんか一人で見てもつまんない。」

笑うことに優劣はないと思うけど、多分父さんの純粋に明るくてアホっぽく、そして爽快な笑い方だったんじゃないかと思う。マイキーのシユールさより、父の笑いにつられてやっぱり、僕も笑ってしまったし、母さんもクスクス一緒に笑って、ああ、僕と母さんに無いものをこの人が全部もってるんだなあ、と思っていた。

「やいちゃん。次はさ、がんばろうぜっ！お父さん、テスト前に範圍先生に聞いとくよ、電話で」

父さんはいった。

「教えてくれるわけないから、別にいいよ。それにもう大丈夫。」
僕は、含みも無いお父さんの言葉に笑いながら、そう答えた。もう大丈夫だよと。
僕は父さんが好きだった。

「お父さんね、ちょっと出張いつてくるから。ちょっと待っててな。」

怪獣笑顔シリーズゴジラ級で、父さんは僕にそう言って、家を出た。二日たって、三日たって、一週間たって、母さんとマイキーみて、一人でマイキー見て、漢字の練習して、
今度は百点取って、・・・病院から電話がかかった。

「弥一、お父さんと、・・・お話してあげて。」

母さんに連れられた病室で、父さんは知らない人みたいに痩せていた。僕はこんな父さんを知らなかった。苦しそうに悶えながら、もう喋ることもできなくなっていた。周りの医師は、もう成す術がなかったように、俯いている。？ピコッピコッ？と聞こえる電子音は、父さんの心臓の音。命の音。

「おとう・・・さん」

問いかける僕の声が聞こえた父さんは、鼻からチューブを通した顔で、僕を見た。多分、僕だとわからなかったんだと思う。目を細めじっと見つめられた。窪んだ眼、唇が痛々しく切れ、荒れ果てた肌をした父さんの顔を見て息が止まった。

父さんはやつと僕に気付いてくれたみたいで、バイキンマンみたいに歯をむき出しにして笑った。頭を撫でてくれた。僕はどんな顔をしていたのだろうか。

「お父さん・・・しんじやうの？」

そう聞いた僕に、父さんは困ったみたいに眉を寄せて、それでも口はバイキンマン笑いを見せて。口パクで、？ごめん？と父さんは言った。

病名を後で母から聞いたが、長ったらしい名前であったこと以外、覚えてない。治る見込みは殆どなかったそうだ。僕に隠して養生生活が続け、容態が急に悪くなったと母さんに電話が入ったのだ。父さんはいない。もう笑ってくれない。マイキーと一緒に見てくれない。百点取った僕を見てくれない。もう二度と。家に戻って、布団にもぐりそう考え、朝まで泣いていた。

声が聞こえた。

それが、夢なのか。それとも無意識の中で聞いた自分の声なのかは、分からなかった。

「ワタシガ、カワツテアゲルヨ？」

ただ、聞いているその声は、いつも擦れたような音で、

「ダイジョウブ、アナタハ、不安モ感じない。」

たまらなく、切なくて、

「キレイなものはゼンブワタシガ、持ってたアゲル。」

言葉で表現できるなら、夜の氷の湖に、たった一人裸足で立っているような、

「ダカラ、アナタハ、他ト、繋がラナクテ、いい」

冷たさを含む声だった。

キレイな、自分は、見ナクテ、いい。

いつかは、キエル、いのち、に心ヲよせることも、しないで。

大丈夫、アナタハ、目をつぶって、まってる。

涙ハ、ワタシガ、かわりに、流すカラ。

誰かと、繋がらなくていい。

私が、かわる。

「・・・え？」

携帯電話の目覚ましアラームが鳴っていた。また変な夢を見た。父さんの夢を見て、それから・・・あの変な夢にシフトしていた。途方もない疲労感がのしかかっているような気がする。

夢の内容をもう少し思い出そうとして、しばらく記憶の底を探り・・・
・ 思い出したと同時に、体が震えた。

全ての温度を拒絶する、マイナスの世界。
そして、あの声。

確かにこう言っていた。

「かわってあげる・・・」

電話のアラームは、鳴りつづけていた。

1話（後書き）

すみません、間違えて短編のほうに投稿してしまっていました。
何話が続けたいので、改めて連続小説に投稿いたします。
何卒よろしくお願い申し上げます。

2話

第二話

夢というのは、必ずその人自身が体験した事が基になって、出来上がる物だと聞いたことがある。

行った事のある場所、聞いたことのある音楽、出会った事のある人。寝ている間に脳がその記憶のパーツを繋ぎ合わせて、ドラマチックな、或いは意味不明なまどろみの空間を作り出す。

人間の脳は非常に良くできており、長い時間を経て忘れ去られた記憶が、何かをきっかけに夢として再び、抽出されることがある。覚えの無い夢の内容を、予知夢や神のお告げなどと受け止める人もいる。

しかし、それは覚えていないだけで、そのシチュエーションは過去にあったはずである。

じゃあ、僕が聞いたあの声も、本当は僕が知る誰かのものだったんだろうか？

思い出したら、また震えそうだった。

あの声。全部の内臓が凍りつきそうだった。ハッキリした恐怖が今でも付きまとっている。

とにかく、いつまでもこうしている訳にもいかない。もう朝の7時を回った。昨日は、風呂に入ってないし、シャワーを浴びて早く学校へ行かなければ。

僕は布団から這い出た。冬の朝の冷たい空気はフローリングを經由し、容赦なく足の裏へ襲いかかってきた。スリッパを履き、部屋を出てバスルームへ向かう。寝室の前を通り過ぎようとした時、空いたドアから、まだ寝ている母さんを見た。

いつもは僕が起きる前に、仕事へ出かけるのだが……。

「今日、土曜日か」

母さんは、週一回の土曜日休みだった。たまっている疲れもあるのだろう、起こさないようにそっとドアを閉めた。

僕は、最近母さんと話さない。反抗期と呼べる代物は、僕には訪れた事がなかった。そして、これからも訪れないだろう。母さんも、基本的な口の数が少ない人で、仕事で帰りも遅く、必然僕とのコミュニケーションは無いに等しくなってしまう。父さんが、いなくなつてから、僕らの間には隔たりが生まれ始めた。

二人の無口さを補っていた温かさを持つ父さんが、僕と母さんを繋いでいた。

もちろん、母さんのことは嫌いじゃなかったし、むしろたまに見える恥ずかしげにも笑う母さんこそが、僕は好きだった。

父さんが？出張？に出て、帰らなくなったあの日。

母さんは泣き崩れ、僕はそんな彼女に「マイキー！見ようよ。」の優しい言葉も、怪獣みたいに笑いかけることもできなかった。

それでも、その時一緒に母さんと泣き叫んでいれば、親孝行だったかもしれない。

だけど、僕はずっと部屋にこもり、目をつぶり、耳をふさいでいた。

見たくなかった。髪がひどく乱れ、目が真っ赤になり、テーブルに頭をコツン、コツンと打ち続ける、母さんの姿を。

聞きたくなかった。口を大きく開き、子供のように泣き続ける声を。どうしてなのか、理由はその時わからなかった。

「・・・どうして、なんで・・・？あの人が死ぬ理由なんて、無いじゃないっ！」

お願い・・・返して、返してよおお。」

そんな声がキッチンから聞こえる、その度に喉の奥は、ワイヤーで締め付けあげられているように痛くなった。

その日、僕は逃げたのだ。泣き続ける母さんから。

悲しみの海に溺れる母さんより、

僕は自分の心の、ちんけな、幼稚な、平らかさ、を選んだ。

そして僕は

わかる、のをやめてしまった。

母さんの言葉をきき、作ってくれた料理を食べ、一緒にテレビを見る。どれを通して、僕は母さんの気持ち、自分に伝わらないように努めた。

彼女はどう思っ、僕といっしょに住み、高校生の僕を養ってくれ
るんだろっ？

父さんが死んで、真剣に考えた事がある。

もしかしたら、母さんは生まれた僕なんかより、死んだ父さんの方がずっと大事だったんじゃないか？そして、父さんが死んだ今、僕
がここに理由はいったい・・・。

出来の悪い僕といることで母さんは苦しんでいるのかもしれない。

水面が波紋を打つように、恐怖が振動する。

僕は死んだ方がいいのだろうか？

鳥肌が立った。

その答えが、分かるヒントを僕は何一つ、知りたくなかった。

そうするためには、

これから、なるべく、僕は……僕は……。決めた。

僕は、母さんの顔を見ない。

会話をしない。

触れない。

母さんと、心を、つなげない。

心の言葉を絶対察する事が無いよう、感情の持つセンサーを遮断する。

父さんの話は、絶対しない。

そうして、僕は高校二年生になる今日まで、母さんから逃げ続けた。

冬の寒さで冷えた体をシャワーで温め、学校へ行く仕度を急いで済ませた。

朝食のシリアルを食べ終えて、キッチンに食器を片づけ、玄関へ向かおうとした時、母さんが寝室のドアを開けた。

母さんは、今、三十七。父さんと結婚した後、直ぐに僕が生まれた。父さんと母さんの、なれ初めは詳しくは知らないけれど、大学の研究室が一緒に、その頃からの付き合いだそうだ。

母さんは、控えめでありながらも、顔だちが良く、清楚な感じの女子で、男子からの人気は高かったらしい。

その、当時の面影は今でもちゃんと残っている。顔に、少し皺が浮かんでいるが、凜とした眉、少し小さめの唇、真っ直ぐな鼻すじ、目は……、

目には隈ができている。やはり疲れているのだろう。

「もう学校いくね。」

言いながら、僕は玄関のローファーを履く。

「……ご飯は食べた？」

「食べた。」

キッチンにある、シリアルの袋を指さして答えた。

「ああ……、コーンフレークね。……うん、行ってらっしゃい。」

「いつてきます」

言いながら、ドアノブに手をかける。

「あ……、待って、ヤイちゃん。」

「？」

僕は振り返って、母さんの顔を見た。

その目は、なんだか少し潤んでいるように見えた。

その瞳で不安げに僕を見つめて、言った。「今日、なんだか……」

「トテモツメタイノ？」

体が、一回だけだけど・・・震えた。

・・・声が・・・。

母さんの声が、

夢で聞いた？あの声？と重なって聞こえた気がした。

心臓と思考が、止まった気がした。吐き出そうとする空気が、肺に逆流する。

「早く帰っておいで。晩ごはん、温かいもの用意しておくから」
母さんは笑いながら、言った。

「あ・・・、うん、行って・・・きます・・・。」

一瞬降りかかった不安を振り払い、言って、玄関を出た。
母さんの顔は、見なかった。

鉄塔たちを横目に、自転車で田んぼ道を走り、駅を目指す。ペダルをこぐ足は重い。

嘘だ。夢の中で聞いた声が聞こえる訳がない。絶対ない。

あの声は、きつと気のせいだ。人の声が別な感じに、聞こえることもあるだろうさ。

ゲームのやり過ぎで聞こえないはずのBGMが聞こえることだってあるのだ。

うん、大丈夫。母さんも、僕も大丈夫だ。

そう、自分に言い聞かせた。大丈夫なんだと。

根拠もなく、自分に都合よく考える僕の思考回路はポジティブなんて、真つ当な代物ではなく、ただ、見たくないものから、結局逃げているだけだった、と事が終わった後から気づき、後悔する。

僕の悪い癖だ。

逃げることも、後悔することも。

そして、この日。

僕は後悔をする。

母さんの声が、あの声に重なったあの時に、気付くべきだった。父さんが、死ぬべきじゃ、絶対なかった。

僕が、いなければよかった。

どんなに思っても、過去を憎む言葉には、さしあたり何の助けにもなってくれない。

ただ、言える。

僕は逃げることは、できなかつた。

2話（後書き）

つたない文章、読んでいただき、誠にありがとうございます。
今後とも、定期的に？続けられれば幸いですので、
よろしくお願い申し上げます。

蒼木 荘

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137ba/>

コネクト

2012年1月12日01時54分発行